



まるで夏本番じゃないか

まだ5月だってのに、冗談じゃないぞ

くたびれた背広を手に、男は病院へ向かう長く緩やかな坂道を歩いていた。

吹き出した汗を黄色く変色したハンカチで必死に拭いながら、こんな坂の上に病院を建てた関係者全員を胸の中で呪っていた。

あの事件を担当した時から1年以上も経つというのに、この坂を登るのはこれが二度目だ
たったの二度だけ

いくら捜査本部が異例の短期間で解散したからといっても

いくら自分が当時はペーペーだったからといっても

ガイシャに会ったのがたったの一回で、それも先輩の御供で話すらしてないなんて

んなのは刑事の仕事じゃねえ

形の上では継続捜査となったが、実の所は迷宮入り決定だ

今じゃ署内で話題になる事すら稀になっちゃった

暇を見つけてはコツコツと調べ続けてきた

血の滲むような思いをして、念願叶ってやっと刑事になったんだ

その初めての事件であんな挫折を味わされて黙って泣き寝入りなんぞ、俺は絶対にしないぞ

デカ人生の始まりでけっつまずいた、この借りは必ず返してやるからな

男の決意はそれ自体が呪詛と言ってもよかった。

病院というより宮殿の入り口と言った方がふさわしいような豪華な正門をくぐると、広々とした中庭には患者や見舞いの客、職員達がそれぞれ思い思いに時間を過ごしていた。

目的の病棟を探しあぐねていると、丁度あちらから白衣に身を包んだ男が歩いてきた。

ガッシリとした体躯。セパレートタイプの白衣。ひとめで医者でなく理学療養士か何かだと判る姿だった。

「すみません、B棟ってのはどっちになりますかね？」

聞かれた中年男が怪訝そうな目でこちらを見る。

「ああ、怪しいモンじゃないよ。ホラ」

警察手帳を見せた。

中年男の顔に過剰な緊張が走ったのを、彼は見逃さなかった。

「XX警察署の柴田ってモンです。今日は折り入って話を聞きたい人がいてね、久しぶりに訪ねてはみたんだが、どうにもここは広くてねえ」

「B棟ならそこの角を曲がって左だ。すぐ判るよ。じゃ」

中年男はそそくさとその場を後にした。

あの男、どこかで…

軽い引っかかりを感じながら、柴田刑事はB棟を目指して歩き始めた。

◇

「ねえジュン」

「なに？」

「そろそろ聞かせてくれないかなあ〜」

「なにを？」

「ワタシ今度はちゃんと覚えてるよ、あの時ジュンが言ってくれたこと」

車椅子を押す殉に、少し甘えた口調で話しかけながら、加夏子は後ろを振り返った。

「いわない」

「どうして？」

「僕も覚えてる、から」

ぶっきらぼうに殉が答える。

「恥ずかしいコトはないのだよ、堀川くん。ワレワレはかなりトクシュなジョーキョーにあったのだからして、キミのケッシのкокハクをワガハイはヒジョーにヒョーカしているのだ、ウン」

軽く顎をあげ、ちょっぴり突きだした唇から息を吹きかけるように気取った口調で加夏子が言った。

「なんだよそれ」

「つまり、嬉しかったってこと♪」

「なら素直にそう言えばいいじゃん、調子狂っちゃうなあ」

まばらな人影に遠慮する事もなく、二人は陽光の差し込む廊下をじゃれあうように喋りながら進んでいた。

「ところで、どうしてあの時すぐに帰っちゃったの？ まるで逃げ出したみたいだったよ」

「あ、イヤ、銀さんがね…何だか急ぎの用事だか急患だかがあったみたいで…」

「銀さんってお医者さんじゃないでしょ？ 急患だなんて、ヘンなの」

「僕にもよく判らないんだ、ゴメン」

殉は胸の中で手を合わせていた。

実の所、脇で聞いていた殉にはあらかた見当はついていて。

それだけに、おいそれと加夏子に話す訳にはいかなかったのだ。

「フウ〜ン、まっ、いっか」

加夏子はあっさりと引き下がった。

「キミ、清水加夏子さん、かな？」

おしゃべりに夢中だった二人は、その男が傍に来ていた事に気が付かなかった。

「…はい、そうですけど。どなたですか？」

「いやあ、デート中を邪魔しちゃったかな」

男は下卑た笑いを浮かべ、懐から小さな手帳を取り出して見せた。

「××署の柴田です、お会いするのはこれで二度目だが…覚えちゃいないでしょうねえ」

「警察のひと、ですか」

加夏子の顔に緊張が走った。

◇

廊下の角から、銀さんが三人の方をジッと伺っていた。

その彼をまた伺う者が。

白衣のポケットに両手を突っ込んだ痩身の男…

九十九は無表情のまま、奥の壁に寄りかかっていた。

◇

「事件のあと足と記憶に障害が残ったんですね。ご愁傷さまで」

最後のひとことに加夏子は露骨に顔を歪めたが、柴田はお構いなしに言葉を続けた。

「先日、善意の一般市民から電話を頂いたんですよ。『あの事件の被害者に記憶が戻ったようだ』と。それで事情を伺いたいと、まあそういう訳で」

蛙のような目で加夏子を舐め回す。

「複数の目撃者がいたが犯人像は霧の中…いや闇の中か、どいつも口を開けば黒い影、黒い影ばかりでね。直接の被害者であるアンタが何も覚えていないんじゃお話にも何ものりゃしないってな具合なんで」

「わたしも見たのは黒い影、それもほんの一瞬でした」

きつい視線で加夏子が返した。

「そう言わずに、何でもいいから思い出してもらえませんか？ 特徴とか臭いとか」

「あの、刑事さん」

殉が初めて口を開いた。

「ん？」

「彼女、まだ記憶が戻ったばかりなんです。これから少しずつ記憶も戻ってくるんじゃないかと思うんです」

「…それで」

「彼女も御両親も、犯人を捕まえて欲しい気持ちは同じです。ここは病院ですし、時間をかけて彼女の記憶が戻るのを待ってあげてくれないでしょうか」

「名前は」

「え？」

「名前は、と聞いているんだ」

ドスの効いた声で柴田が言った。

「堀川です、堀川 殉」

「いい事を教えてやろう。あれからもう1年以上が経った。時間はもう充分に経ってるんだよ。こうしている間にも事件は風化してるんだ。メクラふぜいが聞いた風な口きいてる今もなあ！」

柴田は殉の胸ぐらを掴むと顔の前に引き寄せ、突き放した。

殉はよろめく身体を壁で支える。

「ちょっと！ ジュンは関係無いでしょ！！」

加夏子が車椅子から飛び出さんばかりの勢いで抗議した。

「おっといかん。癖が出ちゃった」

殉に悪かったなと頭を下げ、柴田はまた後日伺いますよと言いその場を後にした。
背中に怒鳴り散らす加夏子の声を聞きながら、彼はある事を思い出していた。
容疑者候補に一人、面白い男がいたことを。

自衛隊あがり
民間警備会社のOB
マシンのような殺傷術を身につけた男
完璧なアリバイ

名前は確か…
ホリカワ

柴田は振り返り、ギラリと牙を剥いた。